大和名所圖會

2906
ル 4
4873
1

1873
1
38-0058

智愚不同飛沉有異衆生
洛陽銅駝坊住寧樂植槻
傍家素匱窶而急惠子之
五車性特闕散而抱季仁
之三願蓋吏惟此山跡國
者兩尊鼻子之洲八荒首
闢之地干帝都干神籬梵
王之所庐仙客之所萎歷

世遠矣累年久矣物換星
移而陵谷易位彼之三笠
之山呼皇祚之万代四社
之靈護佑宮之千秋洋々
乎盛矣豈非信義之士哉
其餘名區勝蹟或詠於倭
歌或載於唐典者不寡矣
余不自揣竊欲爲之志者

有年矣而學不富二酉材
不兼三長求諸旧史則昧
沿革綴諸新諸則惑適莫
而素志益堅確乎不援既
而擢揚古記二百餘部囊
括成二十卷名曰和州舊
跡幽考唯憾不洗仁裕之
腸胃而淬江淹之筆鋒也

非敢傳之好事聊以備遺
忘而已
延寶九年歳次辛酉孟夏吉
且林氏宗甫涉筆和州添下郡
郡山之草舎

和州舊跡幽考目録

第一巻 添上郡

春日明神御鎮座 大鳥居
春日野 馬出橋
二基塔 付 本尊并奠上事
行罡 御旅所
雪消沢 率川 付 鹿道○古口
橋○善趣橋○車屋殿○五位橋事
二花表 付 裰戸宮事
神垣杜 神垣山

著到殿 付 地獄谷事
榎本宮
青龍橋
中間道 付 釼先石事
藤鳥居 付 内侍門○僧正門○慶賀門事
御手川
小社
春日四所明神
内院小社中院小社事
直會殿 付 法華八講○舞殿○林檎場事
南門 付 歎向石○如意石事
若宮外院小社
布生橋
若宮 付 内院小社○曼陀羅事
若宮外院小社 付 拝石○春日神位階○行幸始
○神供領○春日祭○霜月祭礼事
水屋社 付 水屋川
屋 付 霊寶事
○能事
三笠山
天地院
備香山
春日山
本宮嵩
武藏塚
鶯瀧
香山
高円山
高松山
白毫寺
焼春日 付 二座社事
尾上宮
若草山

羽買山
飯合川

能登川

和州舊跡幽考第一巻

添上郡

春日明神

春日明神乃御鎮座ハ人王四十八代稱徳天皇神護景雲元年六月廿一日にけるはぢら乃神常陸國かしまより御徑和にて渡ましませ給ひく伊賀國名張乃郡なか川といふ所にうつり給ふ供奉乃人ハ時風秀行（時風乃末ハ神宮の預なり 秀行の末ハ造宮の預也）ねきハ乙野丸（禰宜の祖 森本氏）同年十二月七日薦生乃中山にうつらせ給ふにあめして時風秀行供御より栗栖なりしが神感浅しくて燧栗乃姓をぞ給ひし時風秀行が末葉中臣乃姓乃下に燧栗氏とあらためし乃根元なり同二度

正月九日大和國安部山同十一月九日ニ三
笠山に遷座し給ふ 春日記 公事根源の説と
ハちがひあり又神白紀廉にめして鞍の
上に榊をさしてその人にめせ乃雲あり雲の上
にあり乃かゞみあらはれさせてりうや給く
三笠山より遷り給ふとも説あり 盛衰記 さる
猶も天兒屋根命ハ河内乃平岡より齋宮舎ハ
下総乃香取より姫御神ハ伊勢乃渡会より來
里給ふ天照太神乃分神なり託宣乃事により
平て山門より勅使をたてらる三笠山乃下
津岩根に宮柱ふとしきたてゝかの四殿乃明
神とあがめ奉る景雲二年より延寶七年
まで凡九百十四年靈験日々に新なり

此所に鳥居あり大鳥居といふ是より十あま
り乃東に春日乃大宮四社若宮一社ありそれ
道すがら古跡名所あり左に記す

大鳥居

一乃鳥居の二柱に素榊一本生ひそひて入り
春日古記 あく緒よわ法
榊葉に木綿しで付て打たらふ男にハいづれの雲霧を
此所より東ハ春日乃やしろのうしろまでを
春日野といふ此鳥居乃まへ川の東かたに
飛火橋あり馬出橋といふその外に二基
乃塔の跡あり

春日野

万葉 千早振神のやしろしなかりせば春日の野辺に粟まかましを 娘子

堀川太郎
春日野乃若葉ハやくと見てしかなよそにも聞けるつみ蕨 公實

一文紀行集
ちはやひとことよみつけても春日野の若紫をかざらんのちぞ 慈鎮

拾玉集
おのれ思ふ人ハ神よ頼みしそよ春日野乃撫麿の姿

拾遺愚草
朝日さす春日乃小野のかげなれば雲の下葉 定家

壬二
春日野やかけてくもれる梅がえに霞乃ひまに鶯ぞ鳴 家隆

難題百首
春日野ハきのふの雪乃消えぞこよ若菜つむ袖ぞうちしけふ 定家

師兼千首
春日野や霞よかけて若菜乃文をしるしてゆくかへるらむ

草根
春日野もやまかげよる花ぞかかれともなし人乃摘そめ 正徹

宇治殿頼通
禁花搦かりそめけるの巻よその長道わか ぎみ少将によるかせ給ひし二月に春日にまゐらせ給ふ 暑せのつゆきえするうねどに おぼされくやまいみおそれせ給ふも ことわりなり暑くせ給ふる又乃日雪のいみおそれ

ぬりぬるきバかへすがへす おもふ人

わかなつむ春日の野邊よ雲なれバ心たかくいるはるかなれ人ぞ見る

法久へし四条大納言公任

身ながはておぼつかなくバ花やさく春日の野邊の行かへり

見ゆるやと老いて 花山院

我のみよおもひしそやまず春日野の雪消をいつでこゝろのぼらん

馬出橋

春日古祀
千早振甲斐の黒駒引よせてのりていさむる春日野の原

あまくだりける神の御心

二基塔 号新御願

傳へ聞東塔は天安二年そめせらる大臣良房公乃御願本尊ハ釈迦薬師地蔵観音也 貞観三年に遺唐使惠得まして来朝乃霊

赤栴檀の像なりし後覚信僧正一乗院に御
入室の時父師実公時の長者にておはしけるが八一の
の霊宝を祈のひ僧正にゆづりまゐらせけれ僧正が
後にかの霊像をいりくのつきにせんやとて此塔に
まつりしとぞ　楓西塔も都にやう浪の釈
薬地観の四佛を安置し又僧正覚昭造営せ
られて後文殊を始めとして今の佛ともに師子ヶ
座なりしとかや後廃永十八年壬十月廿八
日二基の塔雷火にかかりて灰燼となりぬ後は
真福寺一乗院に御座ありしが寛永十九
年十一月廿七日又炎上ありければ霊佛ハ
つゝがなくてぞ移し給ひし楓長講堂延宝元
年再興ありて乃後八そまにうつされ同二年

九月に万縁を結ばしめんとて開戸ありしに八
人群集せりとぞきこえし

行罷

西行法しが撰集抄に春日野のけしき一もと
の塔にありさ夜るあの橋をあしもかくろう
梅みなんわかむしりけさの中のりあまたへもみまた
つゝむる小笹原玉笹のうへに玉あつまりぬ
ひらちむ事ごとく松のみどりへ君がさ
め千代のいろをやかならむとかきしハまれ
かりけるや

又此東に若宮の御旅所あり

若宮御旅所

旅所は宮居もなく芝生に露せもとめ

尾花散れて木の葉なる路分る道もなかし出る霜
月の祭礼に黒木乃柱青松葉にて軒をかこりかこ
御殿をたて若宮乃わたまし給ふ
旅所東に行南へ分入かそ道に雪消の沢あり

雪消沢

堀川太郎百首
春日野乃雪消の沢に袖たれて君がためとや小芹をぞつむ　仲実
夫木集
春日野や雪けの沢はふかくさ花ひら移り露にぬれて　同

大道乃東におそき流れあり南都の人手洗ともいふ是を率川といふ

率川　付廉道　善趣橋

万葉
はねかづら今する妹をうらわかみいざ率川の音のさやけさ
率川の祭礼穢あり川より家が廉道
此ハ昔ハ春日明神廉にめでて渡り給ふ

道なればなり神職家より廉道ととなへ来り
法師ハ六道とうけたまはり家より又板橋あり石
橋あり板よりそうけたる故古ハ橋乃橋を石にかへて
わたせるを善趣橋といふ撰集抄に六乃ちまたの
ゆきにまかれ六道乃ちまたに善趣擬せり御ぞれ
道やこまとかりんと善趣橋とてとめませばみやこし
ろもやうく近きはねとうりかくまし
極楽行をゑに車屋殿に伝の橋二乃鳥居あり
にて伝乃橋とよあれ

春日古記
うちわたせる橋にさ五色の雲たちて汝にかみの御猿たたし

二鳥居

春日古記
鳥居さいた左右にろう間乃祭あれやあり川より給へ帝乃御神
鳥居の内乃穢戸宮ハ瀬織津比咩神　春日記

又東乃山ぎはに神垣の森の跡といひつたへあり

神垣森

風雅集
神垣乃森の木末はかすみつゝ尾上のそらに春日野乃原 院御製

神垣山

神垣乃森也と同かりや類字名所大和国と云
ミしのはに春日なりとありけれどもさだか
ならずといふまゝ川家にあらはれ知るべし
なし

後撰集
千早振神垣山のさかき葉は時雨に色もかはらざりけり 読人不知

玉吟集
千早振神垣山もさかえん日や掬ばぬ袖乃露の色なる 家隆

神垣乃森のあたりよりわかるゝ道二
筋あり先川上乃かたへの道をゆけば

着到殿 付地獄谷

着到殿は延喜十六年二月に造立し此所は春
日祭乃勅使とゞまりて役人等是に着到す
のち後神前に詣てらるゝより山奥あり
此南に地獄谷也といふ所ありむかし興福寺に
小輔僧都璋円とて解脱上人乃御弟子に
碩学乃人あり遷化乃後いかなる事にや有女
身に託して種々にかたりけるは中に我大明神の
方便によりて死かゝる罪を遁し
ことくのかるゝ深重乃罪人なりしを
此方乃地獄へは落さずして春日野の下に
地獄をかまへて月ごとに酒水をそゝぎ経
陀羅尼をよみて閻をすくひ給ひけるとかたり
我も魔道に沈みつれども慈悲方便乃酒水

にはいりて三熱の苦しみをまぬかれ和光垂迹の説
法を耳にふれて九泉の楽しみをきはめんとあり
がくくはあらむやそもさりけるは国人みな感
歎をなせり　沙石集　あまてらすと地獄苦の説とやせん
東の方より榎本の宮あり

榎本宮

猿田彦神　春日記　春日山の地主也といへり春日明
神大和国あべ山よりうつり給ひける時猿田彦神
あべ山に行御して是より此は我領する霊山
あり三笠山とかしこよりうつり給ふと申して此安
部山を譲りて代に給へり明神忽よりうつりて三笠
山に跡をたれ給ふ　春夜神記　此社に毘沙門の像あり
榎本の宮の前に青瀧といふあり橋あり

それを青瀧の橋といひ瀧は青瀧の
瀧ともいふ是より若宮に中間道とて
ほそ道ありそれにかさらひの橋とそ
いふやうなる橋あり

青龍橋

春日古記
青龍の橋をわたりし神水をうけ鏡を御身則弘上人　解脱

中間道

同
何事もなき三笠の中間道杖のみぞたてしのびぬる
立かへりて左の方の道筋を北東の方随に
ト旅戸宮神近衆の方より鈴木の石
也といふありいかなる盤勝りやさ石をとやも
まくも物をなばあしかりなんといひつる
へける東に行て鹿の鳥居あり

藤鳥居

むかし此鳥居に藤あり春毎に咲みだれて栄
けるゆへ藤乃鳥居とは此ひとりそれ藤も枯果
て後ハ鳥居乃左右の柱ひとつから乃藤枯うせ
行とてつねにくり乃藤の花をわりて飾し
ぐ侍べし此或流にあり

新千載集乃詞書に元弘三年立后月
次乃屏風に春日祭乃儀式ある所を
立よらば浅きも心をよ藤乃鳥居乃 後醍醐天皇
回廊に三乃門あり此ハ内侍門中ハ慶賀門
此門の南の方乃門ハ治承二年に門と成
きるとぞ 春日旧記 此回廊乃東のりくよりに
あづまにありみくらし川なり

御手洗川

春日野乃松のしげみをくもで流川乃水きよて影もえ
みかさ山下乃藤乃花よりぞ
乃藤の花をもふは流川とうけり 摂津守 寄抱神

小社

内侍門とをりて水の穀乃忠隆金剛童子社ハ伊弉諾尊
ゆ東に椿本乃明神乃社ハ三見宿祢孫命乃社乃南より
風神乃社ハ立田明神瑞籬を越て榎本明神の社ハ
ゆ東に大山上吹神佐羅神乃社ハ田心姫此乃栗事乃神
乃社ハ大歳升る此社乃南に海本明神乃社ハ大物主命
ゆ東に西にむかふ社ハ八雷神の社しいづまも
春日記にくはしくみへたり

春日大宮四社明神

二階乃楼門そびへて三の廊乃かけ地祭荒をと
あつらひ四乃御殿南りむかひ給ふ東乃
一の御殿ハ武甕槌神又乃御名ハ武雷神又建
布都神又豊布都乃神とも申す常陸国か
し海乃神なり此神ハいざなぎ乃尊火乃
神かぐつちをきり給ふける剣乃たれより
血走りそゝぎて成り給ふ神なり 日本紀
二乃御殿ハ経津主神又乃御名ハ斎主神又
伊波比之大人とも申す下総国香取乃明神也 旧事紀
神護景雲二年此所よりうつり給ふ 春日記 是ハいざ
なぎ乃尊火の神をきり給ふけるつるぎの頭より
あまれ血化して成り給ふ神なり此神天よ
降りし時なる皇産霊尊の神これを使へ

て葦原乃中国に降りたまふべき神をえらび給
ひし時経津主乃神ぞ降りたまふべしとあり
し時たけみかづちの神すゝみ出て申けり
乃神ひとりのみ丈夫にて我はますらをにあらず
や其詞いきほひはげしかりければ経津主
乃神にたけみかづちの神をそへて葦原乃中
国をたひらげしめ給へとあり二神出雲国に
降り十田狭乃小汀にあまくだり剣を地につき立
給ふ 日本紀
三乃御殿ハ天児屋根尊 中臣祖神也 興台産霊の神の
の児 日本紀 河内国平岡明神なり此神天照
太神あまの岩戸にとぢこもり給ひし国の
うち常闇となりけるときハ太玉乃命と共に天

香山乃い百間ま坂樹絵ねあしわてよろ
えよハ八坂瓔乃五百間御統をとりけ中にえ
よハ八咫乃かゞみをとりけ下にえよハ青和幣白
まさそとりけもろ神ゞりとあひともよいの
り給へハ天照時岩戸をひらき給ふより常
闇乃雲はれ給ひとかうそり 白本紀 天兒屋
根命の御孫座ハ人王四十八代稱徳天皇神
護景雲二年四社明神ともに三笠山に鎮
座乃よし公事根源又まれ安どもわり往
ども春日社家乃紀縁ニハ天兒屋根命ハ人王
卅七代孝徳天皇四年十一月戊申日鎮座あり
三神よさきぢり事王代十一代年暦百二十
一年なり實ハ人王四十五代聖武天皇天平

十二年大中臣清麿三笠山乃春日乃社より本
攝津國河邊下郡壽久山ようたしなりて本
座乃山乃名よまるゆへ壽久山をあらため
三笠山と名付ゆへ三神よさいだちて春日
日山に鎮座あらせ給ふゆへよしがんとそり 春日記
四乃御殿ハ大日孁貴又乃御名ハ天照大日孁尊
又天照太神とさし伊勢の國五十鈴河上乃内宮
まて申しまた

内院小社　付中院小社

内院乃小社二座西よむかふ南乃一座ハ手力雄命乃
一座ハ猿田彦天神社 天御中主尊 中院乃小社ハ四所明神
の神よ岩本明神乃社 住吉明神 四所明神乃東記
よ神護寺乃社次乃南乃塞の神の社 青和幣

乃南ハ宰榊眼神乃社 白和 次の南乃宍粟明
神乃社 宍 神 次 次乃南の井栗明神乃社 ある 魂々
志つくと春日祀よあり

直會殿 又号ハ八講屋ニ付幣殿

直會殿ハ古今集よ大直日とよめるよ關し法
社よ直會殿とて神事よをさむる人乃まゐる
所也 粢案 塵抄 愚 又ハ八講乃屋と号する事ハ法華八
講修行せられしより此名乃起り名付ならびに
幣殿あり祭乃勅使幣をおさむる所なり
△八講乃ゐしめハ人王六十二代村上天皇天暦
元年より二季にとりおこなはれき長者府乃長者ハ
貞信公別當ハ平源大僧正なり又乃説よ人王
六十八代後一条院寛仁元年二月廿日ゆゑ

しるしもありき後人王七十代後冷泉院康
平八年より四月九日九月四日にぞさだめられ
けり 旧記 うせしより中絶し年経りけれど玄寛
文十二年十二月五日より九日まですぐくおこなはれき
式法は舞殿あり貞観元年乃造立
陪従乃かぐらハ宴めして参たるおなく此夫
よ林檎乃木ありつゝんご乃場と号して
春日祭よ奉幣をとゝくおさむる所なり
又二乃橋あり此所一位の橋南を二位
乃橋といふ
藻塩草 やすらひ 八しをのかゝてゆふはふるゝと都の人の宮ねぎけるぞ

南門

南門ハ楼作二重よ二階乃楼門とあり又池楼

元亨年中儀摩宿禰光親造進ともいふ蝸籠回廊
皆ハ同三年に造立あり
当門乃南乃かたはらに赤童子影向乃岩あり近比南に物意石あり此石ハ康保四年此石に座りゐりしを紀究乃あるけれども神主祐任大般若経一部万座乃経を納めしとぞ布生乃橋とも御間乃橋ともいふ橋あり

布生橋

春日古記

ありけるや布生乃橋をとふらひ此より向乃方にて是を渡れ

若宮外院小社

一 童子明神乃社 三輪 神 次乃南の南宮明神の社

金山 炭神 次乃東乃兵主明神の社 諏訪 明神

若宮 付内院小社

若宮ハ天押雲命 天児屋命之児 也より御法要集に書たれども只若宮乃神ハ神主一家乃秘説にて他にしる事なし春日乃記よりくわしく是若宮ハ此御座ハ長保五年三月三日二三乃御殿乃あひだにあらハれ給ひし旅時風乃代孫中臣連是忠三乃御殿よりうつし祝きとまれ其後百廿一年を経て長承四年二月廿七日時風八世の孫祐房別に御殿をたてうつしまゐる今の若宮是なり 春日 記 内院に小社二座あり南より一座 手力雄神 次に一座 通合神 則通合神ハ中臣祐房朝臣乃霊社なり祐房若宮をうつしまゐりて後仁平二年十二月廿四日に卒して廿七年

さと深く治暦二年に神託ありて通合神と崇め
春日記 因に小山やしろに春日曼陀羅あり寿永
年中喜賢寺殿基通公の御夢想の図なり
長保四年に若宮出現してより延宝七年まで
凡五百四十余年なり

若宮外院小社

廣瀬明神の社 俗云兎子母神 次の南に懸橋明神の
社 葛城神 其南に卅八所明神の社 神日本磐余彦尊 伊弉諾伊弉冊
其南に佐良氣明神の社 蛭児神 ゑびす 南にも弁
財天の社又南に紀伊の社四座 日前神 五十猛神 大屋姫命 抓津姫命
春日祀にあり卅八所の南方に祓石あり解
脱上人の神を礼拝あり或といふ又明恵上人
まて何れともいふ解脱上人笠置の隠居に

明神を請じ給ひけれど童子のかたちにて上人
の机上に来りてうたを給て
我ゆかむ行てまもらん般若臺釈迦の御法のあらんかぎりハ
と神詠ありけるとぞ 沙石集
是より本宮嶽に行道あり
▲春日明神ハ嘉禎三年九月に正一位を授け
奉り給ふ勅使ハ藤原助朝臣也
▲行幸乃始ハ一条院永祚元年三月廿二日 拾芥抄
後一条院乃御時も絶く行幸ありける
に一条院の御時の例を思しめしをかせ給
千載集 ひさしく御幸絶ひける
三笠山さしてきにけりいそのかみふるき御幸のあとをたづねて 上東門院
此行幸時の事ハ栄花物語にくはしく其巻に

らしくあり又建保二年春日乃社に行幸
ありと聞えありかど記れどふぞこゝにしるしも
志るすも侍りけりさてその又乃年は百
首乃うたよませ給ひけるより出来乃事
おぼしいでゝ内乃御製
春日山我もやむかしの花乃香に心そめし神ぞしるらん
▲神供領三千四百七十五石九斗余社家領千五百石余
振田石二斗余燈明領禰宜方千六百五拾一石八斗余乾
合六千七百拾五石余
▲春日祭とりは大宮乃神事なり二月十一月の申
日一年に両度あり勅使などを立給ふ抑此祭ハ
仁明天皇嘉祥三年九月に中臣秀基定めて
参向を始めし後に清和天皇貞観十一年十一

月九日庚申乃夜はじめて祭あり 旧記 嘉祥三年
より延寶七年まで凡八百卅一年なり
弁乳母集
一とせにふたゝびまつる三笠山河てちよと世のげとこそ 常陸
堀川二良
あはれなる神乃御前の乙女子が袖も緑くまがふ山ずり 忠房
家集堀河
わかれぬる春日乃山乃神垣ハ君が代の下もやおぼへむ 範永
拾遺愚草
ふかみ流るゝまもりよとそやそのかみハ三笠と先に天下ぞ知ん
法性寺入道忠通公御ぐしおろさせ給ひし
時春日乃御法楽乃ひさき世給ひ
し上に内侍周防のごめりて行事弁れ
續世継
いかばかり神もうれしと三笠山ふたばの松の千世ふかきを
めぐみかにとぞありける
▲霜月の祭とりは若宮乃神事なり此祭ハ
保延二年九月十七日よりはじまれり 注進状 至後

寛正年中より十一月廿七日に日次の人残れるより（春日旧記）凡此祭の例式左にあらはるまつりより殿乃町大宿所遍照院と号す家にて願主人長谷川党あり。又毎十月晦日に龍田川に行く垢離あり。又それより明神を勧請し十一月廿五日より御湯を参し廿六日春日小社に参籠す。是を遍照院乃わたりといふ。此院より庭立すゝげて雉一千二百五拾六羽兎百廿四耳狸百四十二疋乃贄をかけならべ云饗乃かざりもの献菓子などをつくりて観式おわりし。末社の野邊に栖むけだもの我に縁なくかゝりし園に捕まよへ此獣ハ春日乃神誅によりし或ふみに見へたり。霜月廿六日乃夜御旅所にお成ありて乱拍子

あり。廿七日乃祭礼大鳥居乃東乃ほとりにおゐて例式あり。鳥居乃東乃南都ハ南都御奉行の御陣。其東ハ衆徒裹頭にて列仕丁白杖を持てまもる。鳥居乃東の北頓ハ御門主乃御陣なり。例式凡次第

一番 伶人赤衣乃仕丁二人共よりそひうけ鉾を引。又一人ハ奉幣を持、一人ハ白杖を持けれさぶ仕丁二人あり。又冠纓にて馬上乃伶人わまへさあり。又冠に藤乃花をさして一騎行（関白殿乃御名代とかや）

二番 神子馬にのりてあまた行。扈従乃法師ろ夜まくるゝより行。又ならしに白張乃歩行一人著笠をもちて行。是ハ春日明神出影向乃

附めされし笠とらや
三番細男六騎白張にて素引笛太鼓を持
四番四座乃役者開口のまひあり今春金剛ハ弓
矢の狩衣にて観世宝生ハ船乃狩衣をきて
まふ
五番馬頭児紅手笠に山鳥乃尾をかざしてうし
ろに牡丹乃花を折そへ乃五騎其一騎毎に一
川のもちて異形のおもてにてさまざまの笠
をかぶり木履をはき杖をもつものあり
六番競馬五騎
七番的持素引に赤衣きて行児五騎
尻籠乃矢をおひ馬にのる又随兵五騎よろ
ひかぶとにて行又張騎持馬にてまゐる

八番将馬数十口
九番野大刀大小百腰長大刀あまたあり
十番郷主人十騎是をむかし大和侍乃渡り
と云しめし例なりとぞ長谷川党より
十一番長柄乃槍千余筋
十二番田楽法師本座新座ともに廿六人なる
ごを編木高足なども以て曲あり
右行列乃内に郷主人長谷川党乃中ハ負観十
年壬十二月廿五日勅をやぬかしのなかにらずし
給ぐ春日乃祭女参社乃時供奉よして騎
兵四振人執杖士六十人をすゝめさせ給ひし
三代実録によりていふ以しハむかしの古式をり
ありしとや

同廿七日乃夜御旅にして流鏑馬伶人乃舞
百廿歳なりびより内ふ十歳せいなふ乃舞あり
深更にして還御あり廿八日乃庭四座乃役者
乃能あり後日乃能これなり又田楽法師のう
ち入とりかねあどあり柳せいなふ乃舞ハ神功皇
后三韓退治乃時礒良乃神なめせども海中よ
りさゞひ舞りし童然いふくあれバ我海底よあり
て一揖なりよ十日と終るかどにの御よ蠣がら付まり
是をそらず者ひくまうみをあらせと勅答あり
けるハ謀としてめぐるべしその謀は彼の神
せいなふ乃舞とあのて舞ふなるバその舞奏し
ようんよなじつハまり給へぐらんやとて舞始
奏がらうるく神舞曲よひかれくまてりまもなも

海彼とも良よおなひ給ひしより御れとしてせい
なふ乃舞よふくめんとするなり又なかう舞とも
いふ 誉田八幡縁起 崇徳院保延二年より延宝七年迄
凡五百卅一年なり

屋

座ハあまくあれ中より西川まで乃座とあるハ左
新造の座　竃の座　上乃座　西乃座　本殿
儀乃座　中院の座ともよ六ケの座なりそれが
中よ西の座よハ地盤の霊谷をもんてまり本殿
儀乃座よハ弘法大師乃細字の法華経并
家蔵公乃祝状鎮守府将軍維茂公乃らふ
ひ住吉法眼乃競馬乃屏風ならびよ両堂
小野乃道房つゞ乃一字書五孔乃めぐの

大乗経あり此経ハ太平記にも見へくわしく後村上
天皇より仲算已講へ給りしありがきにも勅
筆乃跋あり
抑此代々天の那衣にまれなきて御閑も法会の最中なるらん
由基らとのまきが文これあらうにみがまをけれ悦舞
村上房にて村上天皇応和三年清涼殿にて
法華講あり南京北京乃名徳二十人召日十座
乃論義ありしに仲算已講ことにすぐれわざ
やうに義の実をとらへし光あり釈書にみへし叡感
のあまりに給ひしとぞ
公方家の仮屋ハ松の屋 千鳥殿乃仮屋ハ但馬の
屋此二ケ乃屋ハ零落して今ハ跡のミあり九条
殿乃仮屋ハ舟戸の屋一条院仮門自分の屋ハ松

の屋大宮神主ハ椿の屋 若宮神主ハ三ノ大社の屋
社家ハ渡乃屋又竹の屋 薬の屋などいふもあり
般若乃屋ハむかし大般若経講書の法師ありし
なきるよりこの名ありとかや 内侍房又ハ細殿と
いひ赤殿といふ堂后春日行啓乃時典侍内侍
などのけ宮なりけり永祚元年三月廿二日一
条院行幸乃時上東門院この屋にまし給ひ御覧
ありし後大宮炎焼乃時四所明神をうつし参らせよ
うつしまゐらせけるに白雲たなびきのぼりけれ
随とおもしきるもとりやさればその夜二ケ乃屋に
うつしまする赤殿乃内に歓向乃間といふあり
神鏡四面あり至徳三年内侍房乃回廊に
うつしまゐりて細殿赤殿とよぶ由なる安居

の屋に後白川法皇の御願金字の一切経あり

氷室社

社の西乃かたはらに氷室川あり
氷室の社ハ貞一そさ乃をの尊貞二稲田姫貞三
南海神女也あるハ毎四月五日に能あり世に
氷室の能といふ是なり濫觴ハ伏見院乃御宇
世の中疫病はやり流行されけるをりにはらバ此
社をいさめなぐさんとて神楽を奏し舞曲をな
しめまひバ霊験ありしよりまりより恒例
となれり

氷室川　社傍

類聚
春日山氷室の氷乃とけぬまでこそ神ハ心に涼せて我なかめけれ　衣笠

夫木
氷室川氷を紀てけふ春日野乃野田乃山さへへぞふかく　為家

千首
契りおきし年今やはらふ氷室川なかれとたえば春日野の神　為尹

天地院

此院絶て久しく後ハ俗に天神山といふ
濫觴ハしらず延義法師一日此院にて七大
寺乃僧をあつめて法会をいとなみしその講師を勤めし
よし歌書にあり廢亡ハ石劔寺乃下にあれ

三笠山

春日山に続てひそびてちいさき山に春日乃社おはします春日山の惣名なり三笠山ハ別なり　顕注密勘

万葉
春日なる三笠の山に居る雲を出見るごとに君をしぞ思ふ

同
大君の三笠の山の帯にせる細谷川の音のさやけさ　人丸

月清集
うき世をも頼る秋ハ我身ハ三笠の山の木の葉の陰にもられ

三二集　かくれぬ(?)よ向きし大和乃三笠乃杜春日野乃枝　家隆

春日山

仁明天皇承和八年春日大神乃神山の内にして狩猟伐木の事当国乃郡司よ仰せて禁制志るされし由続日本後紀に見へたり

万葉　冬過て春し来るらし朝日さす滓鹿能山よ霞たなびく

久安百首　春日山麓乃野辺乃(?)神のまもりと侍従(?)も　親隆

長秋詠藻　ゆくすゑもはるかに見れ春日山高の(?)あがめ(?)の　後成

月清集　朝日影春日乃嶺(?)の霞晴て吉野乃秋乃月　良経

夫木(?)七百首　幾代よ絶ずありてぞ春日山志らもさかへ(?)ぬ浪　経継

八雲御抄　三笠山あるべし山ともありと云

備香山

備香山ハ哥枕よ同じく是春日山なりや然とも

八雲御抄よ備香山春日山別よ志るされたり又清輔(?)ま大和国と云　万葉集第十巻よ備香能山同十二巻よ衣備香之宜本川と点しより正義をわすれたり

哥枕　かりかねの声なくよ(?)人よ河をよりはかりかの山ハ桜そあそん(?)

萩塚　号二手向山一

式人いふ(?)此塚ハ東大寺乃八幡宮乃うしろ乃山続き手向山といふ又此山続き萩塚とも号するしと云此山ハ春日乃社より北(?)あられりいふとぞ扨清輔朝臣歌枕よ萩塚ハ春日乃社の南よ森ありそれぞ安世乃墓ありと云

むかしほうハ大納言兼年萩原良峯安世乃墓

雨もはれけりしかの三統神にあがめし雨也 古今
法同 哥枕 素性法師実すみてこゝろえ難き
古今 手向とは旅ゆく人の神に幣を手向る所なればみちにぬさあけ神や人
詠ありしより手向山ともいふとぞ

本宮嵩

本宮嵩は春日明神はじめて此鎮座の地也
神護景雲四年正月十二日申の時風令九社
より来り給ふ東記 春日記 文乃説 弘法大師の説
しかしながら此ふたつとも今は本宮の社水谷乃社あり

香山

寛平にて大明神是にて般若を説給ひし
所なり 石集にありて此山乃麓は花山乃登り
口あり

夫木
三笠山春をおとにてしらせけり氷をたゝく鶯の滝 西行

高円山

三笠山の南なりおほくは伴が白毫寺山と
いふなる是山なる松山同山名高き也登と五
音通 歌枕なる松山や深き山の国但不審と藻
塩草にあり万葉集にはなる松山とあまた
所に見えあり然るも古人まつもとの
ありいかりけるまり川とぞすゐね

万葉
春日野に時雨ふるみゆ明日よりは紅葉かざさん高円の山

同
霊亀三年九月志貴親王薨じ給ふ時
あづさ弓手にとりもちて丈夫のさつ矢たばさみ
たちむかふ高円山に春野やく野火とみるまで燃

でも有れ火をいくにせんばまがお乃くらくる
人乃すくなさ

万葉
たかまとの野のうへ乃宮はあれにけりたゝしゝ君乃御代とほそけば　大炊御門

万代集
みかさ山春をこゝろにまてる高円乃山乃はつさくら

新撰和歌集
たか円乃野辺乃藤森風ふけば　後恵法師

此山に白毫寺あり焼春日といふあり
南乃尾さかりに鹿野薗寺ありその上乃
峰を尾上乃宮のうち跡といふとかや

高松山

すかた葉なりや此せ乃国といふ

宋集
春雨のふりしく頃は高松乃山の桜はいかにあるらん　家持

夫木
みかされ夜もすがらたかまとの山の嶺にはてる月　読人不知

高松山ハ丹波国なり　藻塩草

白毫寺　寺領五拾石

高円山白毫寺ハ天智天皇乃御願開山ハ勤操
僧正といふ也くはしくにさらん

焼春日

焼春日ハ平岡明神御影向ありて後ハ本宮
乃祭りなりしより後乃遷宮乃後雷火に社
焼しより俗に焼春日といへり春夜神記
乃やしろハ一社ハ春日明神一社ハ法明房悪覚

とせしよしなり　社傳

尾上宮

尾上乃宮ハ清き乃御代乃離宮也といふとぞ
元明天皇和銅元年九月春日の離宮にいらせ
給ふよし續日本紀にあり又天平寶字二年二月

依興各思高円離宮處作歌

万葉
高円の尾の上乃宮ハあれぬとも立し君の御名わすれめや

後京極百番歌合
ふる枝ぞ霞果ぬる高円乃尾上の宮の春の明ぼの

壬二集
雁かね乃声近かるなり高円乃宮の檐や雨そゝくらん

草根集
高円乃尾上の雲乃上人もたちわけぬらん露や野辺の萩原

若草山

俗に清ぐ投り乃山といふ三笠山乃北にあり
びくあり

夫木
今さら妻やこもれる春日野乃若草山に鶯ぞなく　中務親王

哥枕
春日野の若草山に立雉子今朝乃羽音に目をさましつ　頼慧

狗賓山

三笠山ハ中にあり南にならびて高円山
北ハ若草山也三山をいふとぞ

万葉
春日なる羽買山ゆ佐保乃内へ鳴行なるはよぶこ鳥も
大和乃羽易乃山ともあり　藤塚考

能登川

三笠山に近き川なり　八雲御抄　高円山三笠山
乃中より出て西へながれ行

万葉
能登川の水底さへに照までに三笠乃山ハ咲にける哉
此歌の文字を新登川とかくもあれど
に万葉とあり世流布乃万葉集にハ能登川
とあり

飯合川

俗にいや川といふ高円山乃南より出て西は
大安寺乃東にて能登川に落合又郡山
乃大橋川と落合てながれ行

万葉
山ごしの雪まさるらしぬかありや三川飯合川のそへはせくとも

和州舊跡幽考第一巻終